

愛媛大学医学部 同窓会会報

2025 NOVEMBER No.41

発行日／令和7年11月1日
編集発行人／鍋加 浩明
発行／愛媛大学医学部同窓会
〒791-0295
愛媛県東温市志津川
TEL (089) 960-5989
印刷／太陽印刷株式会社
TEL (089) 932-2881



表紙紹介

1986年3月「8期生卒業写真」

CONTENTS

副会長挨拶	2
卒業生からのメッセージ	3
退職教授からのメッセージ	4
活躍する卒業生	6
恩師をおたずねします	7
愛媛大学医学部同窓会会則 細則 申し合わせ事項	8
8期生座談会	10
ドクター総合保険	15
海外医療研修に参加して	16
医学祭を終えて	17
役員一覧	17
医学部課外活動紹介	18
第41回総会報告	21
同期会報告	22
支部紹介	23
お知らせ	24



愛媛大学医学部同窓会副会長就任あいさつ

須賀 義文 (平成 16 年卒、26 期生)

すがクリニック消化器内科・婦人科 院長

このたび、愛媛大学医学部同窓会副会長を拝命いたしました26期生の須賀義文と申します。現在わたくしは、2023年から父の跡を継ぎ、同じく愛媛大学出身の妻とともに松山市内でクリニックを開業しています。卒業以来大学に籍を置いたこともなく、また同窓会の行事にもこれまで参加する機会がほとんどなかった私が、このように巻頭でご挨拶をさせていただくのは大変恐縮であるとともに、身の引き締まる思いです。

今回の副会長就任のきっかけは、鍋加会長が私のクリニックを受診してくれたことでした。開業して間もない頃、患者さんもまだ少なく、毎日落ち着かない気持ちで過ごしていた時期に、同級生である鍋加会長から人間ドックの申し込みがありました。それも当院で初めてのフルコースで申し込んでくれたのです。まだ検査数も少なく、不安を抱えていた私にとって、それは本当に心強く、ありがたいことでした。

検査が終わった後、彼から軽い感じで「副会長をやってくれませんか？」と突然お願いされ、その時は事情をよく理解できていなかったのですが、深く考えもせず「もちろん、なんでもやるよ」と答えてしまいました。それが医学部同窓会の副会長職のことだと知ったのはだいぶ後になってからで、その時は恐れ多さに思わず震えあがりました。しかも「大した仕事はないから」と聞いて安心していただけなのに、最初に任されたのが会報の巻頭挨拶という大役。今ではこうして原稿を書きながら、また別の意味で震えております。

私がこれまで同窓会とかかわることが少なかったのは、卒業後すぐに愛媛を離れたことが大きいと思います。ちょうど私たちの代から新臨床研修制度が始まり、どこか「市中病院でバリバリ働くのがかっこいい」という風潮がありました。私もその流れに乗るように大阪や神戸で研修・勤務を続け、気がつけば十数年が経っておりました。その間、臨床の現場で必死に働く一方、結婚や子育てといった人生の節目も重なり、毎日があっという間に過ぎていきました。母校や同窓会を振り返る余裕はなかったのですが、県外での生活の中でも愛媛大学出身の先生方に助けられる場面は少なくなく、同窓のつながりのありがたさを実感する機会は多くありました。

十数年を経て愛媛に戻り、さらに一昨年開業してからは、同窓の存在がこれまで以上に心強く感じられるようになりました。勤務医時代と比べると、開業の現場はまったく異なります。診療に加え、経営や労務、地域との関係づくりなど多方面に責任を負うこととなり、その重みを日々痛感しております。勤務医の頃は「今日は患者さんが少なくてよかった」ということもありましたが、今は患者さんが少ないと生活に直結するため、そうも言ってられません。また、以前はお願いされる立場でしたが、今度は自分から検査や治療を依頼する立場となり、違った意味での難しさも味わっています。

さらに、医療を取り巻く環境も年々厳しさを増しています。診療報酬は上がらない一方で、労務環境は整備が求められ、社会からの視線もますます厳しくなっています。孤独や不安を覚えることもあります。そんなときに同窓の仲間とやりとりをすると、不思議と気持ちが軽くなります。

これまで私は「同窓会は自分には縁遠いもの」「大学の先輩方が中心になっておられるもの」と感じていました。しかし振り返れば、人生の節目で支えてくれたのはいつも人とのつながりであり、その積み重ねこそが同窓会の大切な財産なのだと気づかされます。

鍋加会長が私を副会長に指名してくれたのは、これまで同窓会に距離を感じていた世代や現役世代にとっての「橋渡し役」となることを期待してのことだと理解しております。大学以外で勤務していると母校との距離をどう埋めればよいかわからず、参加をためらう方も少なくないと思います。私自身がそうであったからこそ、そうした方々にも「気軽に関われる場」と感じてもらえるよう努めたいと考えております。

副会長として微力ながら、会報や行事が昔話だけにとどまらず、現役世代や若い先生方にとっても役立ち、また親しみやすい場となるよう力を尽くしてまいります。そして、私自身も同窓会活動を通じて多くを学び、成長していければ願っています。皆さまとともに同窓会を盛り立てていければ幸いです。今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。



阿部 雅則 (平成6年卒・16期生)

(愛媛大学大学院医学系研究科 地域医療・総合診療学 教授)

2025年4月1日付で愛媛大学大学院地域医療・総合診療学講座を担当することになりました阿部雅則(あべまさのり)です。1994年に愛媛大学医学部を卒業した16期生で、卒業後は愛媛県で内科医として診療・研究・教育の研鑽を積んできました。

地域医療学講座は、2009年に愛媛県の寄附講座として設置されました。地域における保健・医療・福祉との連携を図りながら、1) 将来の地域医療を担う医師を養成するための地域での学生や研修医の教育、2) 地域医療機関における診療支援、3) 地域に根付いた研究活動を行ってきました。とくに、愛媛大学での教育のみならず地域サテライトセンター(西予市地域サテライトセンター、久万高原町地域サテライトセンター、愛南町地域サテライトセンター)での実習などを通じて地域医療マインドの滋養に努めてきました。また、2016年には愛媛大学医学部附属病院に総合診療科が創設され、他の診療科の先生方の協力のもと運営を行ってきました。

私が教授に就任した2025年4月1日から地域医療学講座は「地域医療・総合診療学講座」と再編し、機能強化することになりました。愛媛県は、中山間地域や離島などのへき地も多く、少子高齢化が急速に進行しています。これに伴い、世帯構造の変化、疾病の複雑化、要介護者や生活習慣病の増加といった課題が顕在化し、県民の保健・医療・福祉に関するニーズは、ますます多様かつ複雑な様相を呈してきました。こうした地域における医療を担う医師には、単に疾病の診療にとどまらず、家族・職場・地域社会を包括的に捉えた広範な医療活動が求められており、育成すべき医師像として全人的に診療にあたり、多様な問題・ニーズに対し、幅広く柔軟に対応する医療を提供できる「総合診療能力」を持った医師が求められています。将来の愛媛県の地域医療の担い手に対し、愛媛大学および県内の医療機関と協力・連携しながら総合診療医を継続的に養成することで、医師の地域偏在や診療科偏在といった社会的問題の解消にも貢献し、超高齢化社会において中・長期的に持続可能な医療を提供していくシステムを確立することを目指しています。

今後とも「地域で働く地域医療・総合診療医」を育成することで、微力ではありますが愛媛県の地域医療に貢献できればと思っています。同窓会の先生方には引き続き御支援のほどよろしくお願い申し上げます。



鵜沼 香奈 (平成16年卒・26期生)

(東京科学大学大学院医歯学総合研究科 法医学 教授)

2024年8月1日より東京科学大学(旧・東京医科歯科大学)法医学分野教授を拝命いたしました鵜沼香奈と申します。この度は御挨拶の機会を頂き、心より感謝を申し上げます。

私は2004年に愛媛大学医学部を卒業後、臨床研修を経て、解剖学の松田正司教授のご紹介で東京大学・吉田謙一教授(本学1期生)のもと、法医学の研鑽を積む機会を得ました。その後、2010年より東京医科歯科大学法医学分野の助教として着任し、現在に至ります。

これまで、コカインやタリウムといった薬毒物や敗血症をはじめとする法医実務上重要な各種病態に関心を持ち、培養細胞や動物モデルを用いた基礎研究と、法医実務に基づく研究を両輪とした研究を行って参りました。また、2019年に米国ニューメキシコ州にあるOffice of the Medical Investigatorへ研究留学し、解剖および検案事例において、死後CTの読影レポートと解剖結果の後方視的検討に関する研究を実施いたしました。

法医学のイメージとしては事件死体に向き合うという印象が強いと思いますが、法医学はその名の通り「医学」と「法律」をつなぐ学問であり、社会を医学で守ることを目指す学問なのだと理解しております。つまり、法医学は死者のみに向いたものではなく、生きている私達が暮らす社会の安全を医学で守るためのシステムであると言い換えることが出来ると思います。このような観点からも法医学の意義は重要で、とてもやりがいのある仕事と感じております。法医学が正常に機能すれば社会全体のセーフガードとして役立つと考えておりますので、今後は良質の法医の育成ができるように力を尽くし、さらに多種多様な専門家と連携させて頂いて、精度の高い法医診断を目指すべく努めて参りたいと思っております。

結びに、同窓会の諸先生方には、これまでご指導・ご支援を賜りましたこと、心より御礼申し上げます。学生時代を振り返れば、松田正司教授をはじめ、第一内科の安川正貴教授、薬理学の前山一隆教授、生理学の田中潤也教授など、卓越したお人柄と情熱をお持ちの先生方から、学ぶ喜びと厳しさの両方を教えていただきました。その教えは今なお、私の教育・研究の根幹を支えております。

未だ力不足ではございますが、今後も初心を忘れず精進してまいりますので、変わらぬご指導ご鞭撻を賜れましたら幸いです。末筆ながら、同窓会の皆様のますますのご健勝とご発展を心よりお祈り申し上げます。

卒業生からのメッセージ



赤松 洋祐 (平成17年卒・27期生)

(岩手医科大学 脳神経外科学 教授)

2024年8月1日付で岩手医科大学脳神経外科学講座の5代目の教授に就任いたしました、赤松洋祐です。私は岩手県生まれで盛岡第一高校を卒業した後に、一浪して2005年に愛媛大学医学部医学科に入学しました。大学時代は準硬式野球部と趣味の釣りに多くの時間を費やし、部活の先輩や後輩、苦楽を共にした同期と過ごした事を今でもつい最近のように思い出します。

そのような繋がりがあったことや、岩手に比べて格段に気候も良く居心地最高の愛媛で医師として働きたい思いもありましたが、奨学金をもらっていたため岩手県に戻ることにしました。初期研修は岩手県立中央病院で行い、人体の中核である脳の手術で患者さんの人生を劇的に変えられる脳神経外科の仕事に魅力を感じ東北大学神経外科学分野に入局しました。東北大学では脳血管障害の基礎研究と臨床を行い、齧歯類を用いた新規血栓溶解薬の効果や脳梗塞モデルの開発、米国のUCSFではDoppler optical coherent topographyを用いて疾患モデルマウスにおける局所脳虚血後の脳軟膜吻合リモデリングのin vivo imagingを通じて新規治療戦略の創出に関わる研究をしました。現在も専門は脳血管障害ですが外科治療と血管内治療の側面から低侵襲かつ根治性を求める治療法を日々模索しております。本領域の進歩は目覚ましく、2015年に5つのRCTで報告された血栓回収療法により治らないとされていた重症脳梗塞患者の転帰が劇的に改善することが証明され、2022年に認可されたくも膜下出血術後の脳血管攣縮予防薬により患者転帰が改善するといった目覚ましい進歩を遂げている領域です。私自身もその一端を担える存在になるべく日々の臨床業務と研究に取り組んでおります。

話は変わりますが、私の住む岩手県では喫緊の課題があります。厚生労働省から出た最新版2020年の脳卒中年齢調整死亡率や健康寿命は岩手県がワースト1位となってしまいました。岩手医科大学は県内唯一の医科大学であることから教育、研究と高度医療を提供するだけでなく地域医療の担い手として、急性期脳卒中診療の均霑化は使命だと思っています。そのために脳神経内科、救急科とタッグを組んで急性期脳卒中治療だけでなく、リスク改善による脳卒中予防、リハビリ、就労支援の体制を全県で構築し健康寿命延長を達成できるチームを作っていきたいと思っております。

最後になりますが、年齢を重ねるにつれて愛媛大学OB、関係者の先生にお会いすることも増え、皆様に支えられて今の自分があることを実感いたしております。このような機会を与えてくださったことに深謝申し上げますと共に、今後ともご指導いただけますと幸いです。

退職教授からのメッセージ



大八木 保政 (特別会員)

(愛媛大学大学院医学系研究科 脳神経内科・老年医学 教授)

退任を迎えて

2026年3月末に退任することになりました。2015年5月1日付で愛媛大学老年・神経・総合診療内科学の二代目教授として着任し、特に大過なく愛媛大学での役目を果たせそうで一応安堵しております。

私は、1985年に九州大学医学部を卒業して、九大神経内科に入局しました。現在では日本神経学会の会員数が1万人を越え、内科学領域では消化器、循環器に次ぐ3番目の規模となりましたが、40年前は独立した神経内科医局はまだ少なく、日本で最初に設立された九州大学神経内科には全国各地から国内留学にいられていました。そのような開放的な環境と最も新しい学問領域の一つということが志望理由の一つでした。その後40年間のこの領域の治療法の発展は目覚ましく、近年は分子標的薬や遺伝子治療薬が続々と出てきています。高額な薬剤費が問題ですが、ますます発展が期待される分野です。

当講座は老年医学講座として設立された当初から神経内科領域も担当していました。私の着任後はさらに神経内科領域に重心を移して、神経学会が診療科名を「脳神経内科」に変更したこともあって2019年10月に「脳神経内科・老年医学講座」に名称を変更しました。いつの時代も臨床講座の最大の役目は人材育成で、近年専門医制度が大きく変わりましたが、この10年間で愛媛県の神経内科専門医は29人から40人に、神経学会認定の専門研修施設は3施設から10施設に増え、最小限の責任は果たせたと思います。

研究面では、初代教授の三木先生が設立された抗加齢・予防医療センターの臨床的研究を伊賀瀬先生、越智雅之先生や岡田先生が継続する一方、神経免疫疾患や遺伝性神経疾患の解析などそれぞれの教員が自由に展開しております。私自身も細胞やマウスの実験を少しずつですが進めており、今後も可能な範囲で講座の研究の一領域として継続していきたいと思っております。幸い若手の入局者が近年増加しており、「自由闊達で活動的な医局」の環境が整いつつあり、今後の研究面での発展も楽しみになってきました。

本講座の重要な役目は、愛媛県における認知症などの老年期神経疾患および神経難病の医療連携体制の構築を進めることで、退任後も違う立場で自分なりに講座を支援できればと考えています。最後に、楽しく充実した11年間に共に過ごした皆様に深く感謝するとともに、愛媛大学医学部の発展を祈念しております。ありがとうございました。



薬師神 芳洋 (昭和63年卒・10期生)

(愛媛大学大学院医学系研究科 臨床腫瘍学 教授)

卒後5年+留学後29年＝計34年愛媛大学に在職しました(～定年退職に寄せて～)

早いもので65歳を迎え、計34年間の大学人としての職場を後にすることとなりました。人生100年時代とはいいますが、現実的には「人生90年」で、人生には30年ごとに大まかな節目がやってくると考えています。大学での生活を最期に、自分、というか大学人の人生を自分なりに振り返ってみます。

最初の30年間はまさに成長する為のphase。20代半ばに医者となった当初、医師として勉強させて頂いているのに、給料など貰って良いものか、といった心境でした(現在の研修医の給与は高すぎると真剣に思っています)。実際、自分の行いが患者さんやご家族のためになっていたのか、と自問することも多く、その都度落ち込んだ事も数えられません。お金とともに知識が貧しい中でこそ、同じ思いを持つ友人たちと深く語り合いました。このような時期を持てたこの成長期に、人(医師)としての生き方や方向性を得た気がします。

さて次の30年。特に前半の15年の頑張りが、その後の人生を左右するといっているのかと考えています。遊び(県外・海外での度重なるskiing trip)もしましたが、その横で溢れるエネルギーを仕事とステップ・アップにもつぎ込みました。「社会や医療を変えるのだ」といった夢とも妄想とも言えない志(こころざし)のもと、ただただ前にといった気持ちです。この時期、努力や時間を惜しむことは本当にもったいない、と後輩に言いたいと思います。この15年の踏ん張りで人生が決まる、と言っても過言ではありません。

後半の15年、指導者となり、少なくとも自己満足の出来る医療を、患者さんやそのご家族に届けられる様になりました。ある意味充実はしていたと思います。しかし一方で、忍び来る体力や気力の衰えから集中力・持久力は落ち、横の併走者や迫り来る若い走者の影に焦る日々でもありました。またこの時期、いかに自分を大きく見せようかといった邪(よこしま)な思いにも取り付かれた時期でもあった様に思います。人生が60年も近く過ぎれば賞味切れです。幻覚や妄想に取り付かれ、第一線にしようとするこそ、老害と知るべきでしょう。私がいようとまいと、社会は回り朝日は昇ります。それは寂しいことかも知れませんが。

さて、最期の30年がやってきました。既に患者さんの名前も同僚の名前も(昔は病棟の入院患者を含め全員覚えていたのに)コロコロ忘れます。膝の痛みのため、一段飛ばしで階段も駆け上がられません。記憶力も体力も第一線を維持するには困難な状況です。ただ、不思議なことに正義感だけは強くなり、涙もろくもなりました。朝ドラを見ると直ぐ泣きます。このような輩が、残り30年をどのように生きるべきか。定年後は、人道支援と称してウクライナにでも出かけ、綺麗な女性にチョッカイでも出そうかと思う反面、知識と良識の礎(いしずえ)である大学人であった人間が何たる邪念か、と叱咤する自分がいます。「定年後は花なんて、後からホノボノ思うもの…、定年後は路に迷っているばかり」との迷い道人生がフラフラとしばらく続くのかも知れません。さてさてその一方で、今まで「仕事、仕事」と称し、タイミングを逃した愛情や優しさを、今度こそ伴侶や子供にかけてあげたいとの思いもあります。「時、既に遅し」かも知れませんが…。

みなさま、何処かでまたお会いしましょう。



北澤 莊平 (特別会員)

(愛媛大学大学院医学系研究科 分子病理学 教授)

退官を迎えて

このたび令和8年3月をもちまして、愛媛大学大学院医学系研究科分子病理学講座教授を定年退職することとなりました。2010年6月に神戸大学から赴任して以来、15年の歳月が流れました。着任当初は耐震工事や施設整備の最中で、研究・教育・診療の三本柱を同時に立ち上げる

の必要があり、神戸からの研究機材や試料の移送にも多くの方々の協力をいただき、新しい環境を整備しました。病理診断業務を滞らせないため診断科と教室の一体的運営を心がけ、平成24年には医学部学生時代から共に研鑽を積んだ北澤理子が2年遅れで合流し、病理診断科(病理部)で、専門医一人の過酷な環境を長期間支え、教育面でもベストティーチャー特別賞を受賞しました。また原口竜摩先生の尽力により、分子病理学的解析を個体レベルの研究へと発展させ、教室の発信力向上に寄与しました。病理形態学的診断に分子生物学的解析を加え、エビジェネティクス解析、骨代謝研究、希少腫瘍の診断学的特徴解明などに取り組み、遺伝子プロモーターのメチル化解析、RANKL-RANK-OPGシグナルの基礎研究、希少腫瘍の空間トランスクリプトーム解析へと展開しました。国内外の共同研究にも積極的に関わり、学会や論文で成果を発信し、日本病理学会賞や日本組織細胞化学会賞を受賞する機会にも恵まれました。教育では、基礎と臨床を橋渡しする半年間全員参加型の講義・実習を行い、配属実習では実際の研究課題や臨床症例を取り入れ、英語論文を筆頭著者として発表する学生も多数誕生しました。大学院教育でも臨床各科との幅広い研究交流を行い、病理診断科の若手も国内外で発表・論文化し、医学博士号を取得しました。診療では附属病院に加え、地域の拠点病院で病理組織診断、術中迅速診断、病理解剖を行い、日常業務から研究の芽を見出しました。こうした活動は、先人が築いた医療と教育の基盤、その中で果たせなかった思いや無念に応える努力の積み重ねでもありました。阪神淡路大震災をはじめ幾多の困難の中でも歩みを続けられたのは、歴史への敬意と周囲の励ましがあったからにほかなりません。この15年間で得た経験と人とのつながりは、私の人生の大きな財産です。今後は第一線を離れますが、これまで培った知識と経験を活かし、若い世代の育成と病理学の発展に少しでも寄与できればと願い、長年にわたりご指導・ご支援くださった皆様に心より御礼申し上げます。



上野 修一 (特別会員)

(愛媛大学大学院医学系研究科 精神神経科学 教授)

愛媛大学を退職するにあたって

愛媛大学に34年間在籍させていただきました。今考えてみると、あっという間でしたが、精神神経科学教室に入局後、大学院、米国留学、保健管理センター（現総合健康センター）とお世話になり、最後の17年間は、精神科教授として本学の発展に微力ながら関わったことを大変嬉しく思います。同窓会の方々には、精神科を中心とした医学教育だけでなく、教務委員長や図書館医学部分館長としても関わらせていただきました。大学人として教育、研究、医療の3つの重要な柱である業務の他、東日本大震災をはじめとした災害医療、新型コロナウイルス感染症への医学部や附属病院としての対応など、有事に当たって附属病院を持つ国立大学法人としてどう活動すべきかについて話し合ったことが、つい昨日のように感じられます。医学者は生涯を通して学習する義務があることを改めて感じた時間でした。これまでの愛媛大学医学部での勤務を通じ、優秀な同僚である医療者・教員と、意欲旺盛な医学生、無理を聞いていただいた職員の方々に囲まれ、本当に充実した楽しい時間でした。私の至らなかった点はお詫びし、在籍させていただいた精神神経科学教室を引き続きよろしくお願い致します。

せっかく機会をいただきましたので、若い同窓生の皆様に申し上げます。皆様の中には、上述の新型コロナウイルス感染症をはじめ、自分の思うような学生時代を送れなかった方がたくさんいらっしゃるのではないのでしょうか。また、卒業後、思うような医師としての活動が行えず、悶々とした時間を過ごしている方もいらっしゃるかもしれません。ただ、何があったとしても、人生での一つ一つの経験は、誰にとっても必ず将来への糧となると、私は信じています。もちろん、一人ひとりとは異なった基盤を持ち、立場も異なっていると思います。ただ、誰もが一つしかない命、才能を持っています。皆さんが自分の視点を大事にし、日々の経験を温め、少しずつ、将来への一歩にしていってほしいと願っています。そして、苦しくなったときには、学生時代の教員や友人との温かい交流を思い出し、明日からの力に変えていってください。愛媛大学医学部に在籍したメンバーそれぞれの総和が、我々の理念「患者から学び、患者に還元する教育、研究、医療」につながると 생각합니다。

私は、本学を2025年3月で卒業致しますが、愛媛の地で地域医療にもう少し貢献できるよう頑張ります。愛媛大学医学部同窓生の先生方および愛媛大学医学部のさらなる発展をお祈り致します。大変お世話になりました。

活躍する卒業生



基幹病院に匹敵する循環器専門クリニックを目指して

阿部 充伯 (昭和61年卒・8期生)

(医療法人 松山ハートセンター
よつば循環器科クリニック 院長・理事長)

■ 当院開設のきっかけ

愛媛県は心疾患による死亡率が全国でWorst 3位以内の循環器疾患の後進県です。基幹病院でカテーテル手術と核医学診療に励んでいた私は、何とか愛媛県の心疾患死亡率を改善させようと、志を同じくするスタッフ達を集め、「患者ファースト」を信念とし、愛媛県松山市南江戸に2006年1月5日開院し、今年で20年目となりました。

■ 当院の特徴

当院は、循環器内科医2名、心臓血管外科医2名、麻酔科医1名と放射線科医1名の総勢6名が常勤しています。当院の特徴はまず迅速で正確な心血管疾患の診断と、心臓血管外科医との相互協力による高度な治療技術の提供です。あわせて生活習慣病を管理する「かかりつけ医」としての役割も担い、19床の入院病床を管理しております。

■ 心臓血管外科との密接な連携

当院では、循環器内科と心臓血管外科のエキスパートが密接に連携し、当院を受診した患者の診断・治療は当院で全うすることをモットーに、内科と外科の冠動脈疾患に対するハイブリッド治療（CABG+PCI）や胸腹部大動脈瘤に対する胸腹部ステントグラフト内挿術（EVAR, TEVAR）に積極的に対応しています。

■ 最新鋭の医療機器と各種カテーテル手術

虚血性心疾患の確定診断のため、320列MSCTを早期より導入し心臓血管CTAを施行しています。また、私が核医学専門医ですので、日本のクリニックで初めてRI装置を導入し、PCI適応診断のための心筋シンチを施行しています。

当院では開院当初より、血管撮影装置・CT装置・核医学診断装置・一般撮影（DR）装置・超音波診断装置から送られたDICOM画像および心電図・血圧脈波検査などの生理検査データのネットワークシステムを構築しました。院内のあらゆる場所の約100台のクライアントパソコンでの参照を可能としています。

これらを用いて、冠動脈だけでなく、下肢動脈・腸骨動脈・腎動脈・鎖骨下動脈病変に対するカテーテル手術、さらにリードスペースメーカー植え込み術、心房細動に対するカテーテルアブレーション手術を施行しております。

■ 最後に

超高齢化社会のなか、心血管疾患を早期発見・早期治療して、元気で豊かな生活を長く送っていただくこと、すなわち健康寿命の延伸が今後の医療機関の最大の務めと考えています。

恩師をおたずねします



「私の近況報告」

石原 謙 (特別会員)

(愛媛大学医学部名誉教授)

〈現 済生会西条病院 循環器内科 非常勤〉

高橋敏明先生が、西条市長に就任され、「上医は国を医す」の実践に手を掛けてくださり、西条生まれの私には嬉しい限りです。4月に父を98歳で送りました、天寿の大往生ではあっても喪失感是否めないものです。私自身は心筋梗塞を10年前、西村和久先生に治療していただいて以来、CPAPも活用し全く快調で、若返って遊んでおります。

先日家内と娘の3人でスイス旅行をしました。アイガーが目の前にあるグリーンデルバルトのホテルに3日間滞在でき、ユングフラウ3山を一望できるクライネシャイデックには二日連続で通い、写真はそこで撮影したパノラマです。左から右にアイガー、メンヒ、ユングフラウ。

写真で見ていた期待を遙かに超えたスイスの美しさの連続に驚嘆。登山列車から見える高原の緑と、すぐそばでカウベルを鳴らしながら草を食む牛達と、遠く眼下の湖の景色は感動の連続。

急勾配をアプト式でゆっくり登るため、線路脇もしっかり見ることができ、山肌の掘削や石積みなどにも丁寧な作業の跡が見て取れ、石積みが大好きな私はスイス職人の心意気を感じました。さらには建物の節だらけの木材のムダの無い使い方や水の節約、そしてホテルでさえエアコンを使わせない徹底した節約ぶりに、永世中立国となるまでの侵略との戦いの歴史に想いを馳せると感慨ひとしお。ルツェルンの旧市街やインターラーケンなどにも立ち寄り、チーズフォンデュも繰り返し堪能しました。



行きはカムチャツカでの火山噴火の噴煙のため南周りで向かうヘルシンキまで16時間という長いフライトとなり、予定していたチューリッヒ便に間に合わず、やむなくヘルシンキ市内観光をしたのですが、これがまた大正解！世界一空気が綺麗なという気持ちよいそよ風の中、人々の幸福度が世界一高い街の港の市場でランチを楽しみ、産直の平べったい桃や猿梨を買い食いし、市内を一望してヘルシンキ大学の側を通り公園など散歩できました。また訪れたい！

国内では、全国XIVに96年製の自動車（5気筒FFが快調！）を運転して訪れ、土地の風土とグルメを楽しんでいます。日本も行ってみると、良いところだらけですね！愛媛県内も南予が素晴らしい！

愛媛大学卒の先生方が、日本全国そして世界に羽ばたいてめざましい活躍をしているのを拝見して、嬉しい退職生活を堪能しています。

現役の皆様！退職後の快適生活のために、保険の断捨離、副収入の確保（ネーベン？投資？執筆？特許？）にお努めください。



「愛媛大学医学部同窓会会報に寄せて」

牧野 英一 (特別会員)

(愛媛大学医学部名誉教授〈元 糖尿病内科学教授〉)

私は千葉大学第二内科（糖尿病内科）出身で当時の吉田尚元教授のご推薦で愛媛大学臨床検査医学武内望教授の後任として1996年に赴任致しました。その際第二内科日和田邦男教授のご尽力で糖尿病内科としてスタートすることができました。

当時、愛媛県では糖尿病専門医が県病院の藤井靖久先生、日赤病院の高上悦志先生、近藤しおり先生らを中心に和気あいあいとやっておりました。そこで先生方と1998年より県内の成人発症1型糖尿病の実態調査を開始しました。ちょうどその頃、花房俊昭先生の劇症1型糖尿病（NEJM2000年）に関する講演をお聞きし大変感銘を受けました。そこで直ちに県内の基幹病院の先生方と協力し、私どもの5症例をまとめ発表しました。さらにたまたま私が糖尿病学会の理事であったので、劇症1型糖尿病調査委員会を立ち上げ今川彰久先生らを中心に全国調査を実施しました。その成果をまとめ、世界に先駆けて発表することができました（Diabetes Care 2003）。またその結果に基づき劇症1型糖尿病の診断基準を作成いたしました。現在は、この数十年間の劇症1型糖尿病症例の文献調査を詳細に行っており、近々まとめて発表の予定です。

臨床研究を進めるにはその時代の最先端のテクノロジーと疾患についての最新の情報を駆使することが重要です。古い話で恐縮ですが千葉大学在任中、後輩の蛭名洋介先生が1985年ヒトインスリンレセプターのcDNAクローニングに成功しました。そこで教室の平良真人先生、島田典生先生を蛭名先生の研究室に派遣し共同研究としてこの技術を用いてインスリンレセプターの欠失変異の2症例を同定しました。その成果は平良先生がScience誌（1989）に、島田先生がLancet誌（1990）にそれぞれ発表することができました。

私が若い先生方に言いたいのは「症例は生きた教科書でありしっかり観察せよ」ということです。勿論患者さんは人格をもった一人の人間ですので丁寧に診察すべきであることは言うまでもありません。しかし同時に、その症例が世界初の報告につながるかもしれないということも常に肝に銘じておくことです。そうすると運が良ければいつか宝の山に当たる可能性もありますので。

最後になりますが、私が愛媛県で共同研究を進めるにあたり幸いだったのは、県内に古い大学がなかったため、学閥の影響を受けることなく和気あいあいと研究を進められたことです。ここに改めて共同研究にご協力いただいた多くの先生方に心より感謝申し上げます。また同窓会の皆様の益々のご活躍と、愛媛大学医学部同窓会のさらなる発展を祈念致します。

愛媛大学医学部同窓会会則

第1章 総 則

第1条 本会は、愛媛大学医学部同窓会と称する。

第2条 本会は、東温市志津川 454、愛媛大学医学部内に置く。

第2章 目 的

第3条 本会は、母校の創立精神を尊重し、会員相互の親睦を密にし、学術の向上を図り、母校の発展に積極的に寄与することをもってその目的とする。

第3章 事 業

第4条 本会は、前条の目的を達成するために次の事業を行う。

- (1) 会員名簿、及び会報の発行
- (2) その他、本会の目的達成に必要な事項

第4章 同窓会会員

第5条 本会の会員を次の通りとする。

- (1) 正会員
愛媛大学医学部医学科を卒業し、かつ会費完納の者
- (2) 学生会員
愛媛大学医学部医学科に在学中の者
- (3) 特別会員
愛媛大学医学部教員、及び元教員のうち入会を希望する者。但し、正会員を除く。
- (4) 準会員
愛媛大学大学院医学系研究科を修了した者のうち入会を希望する者。但し、正会員を除く。
- (5) 賛助会員
愛媛大学医学部、及び愛媛大学大学院医学系研究科に縁故のある者で、役員会の承認による。

第5章 同窓会役員

第6条 愛媛大学医学部同窓会に次の役員（計16名）を置く。

- | | |
|-------|---------------------------------|
| 会 長 | 1名（任期は3年、2期6年を超えない。） |
| 副 会 長 | 2名（会長が指名し、役員会の半数以上の賛成をもって承認する。） |
| 常任幹事 | 3名 |
| 幹 事 | 8名 |
| 監 査 | 2名 |

第7条 本会の役員は、総会において正会員のうちからこれを選任する。

第8条 役員は、それぞれ次の職務を行う。

- (1) 会長は、本会を代表し、いっさいの会務を統括する。
- (2) 副会長は、会長を補佐し、会長に事故のあるときはその職務を代行する。
- (3) 常任幹事は、常時それぞれの担当会務を処理する。
- (4) 幹事は、会務に参画する。
- (5) 監査は、会務・資産及び会計の監査に当たる。

第9条 会長以外の役員の任期は1年（4月1日～3月31日）とし再任を妨げない。ただし満70歳定年制を定める（細則に記載）。

2. 補欠により選任された役員の任期は前任者の残任期間とする。
3. 役員は、任期終了においても後任が決定するまでは任務を行うものとする。

第6章 会 議

第10条 本会の会議は、会員総会、役員会（計16名）、及び常任幹事会（会長、副会長、常任幹事、計6名）の3種とする。

第11条 総会は、本会の最高決議機関であって会員をもって組織する。

2. 総会は、通常総会及び臨時総会の2種とし、役員会の決定に基づき会長がこれを召集する。
3. 通常総会は、年1回（9月第一週土曜日に）開催し、臨時総会は必要に応じて開催する。
4. 総会の議長は、出席正会員の互選によりその都度選出する。
5. 総会の議事は、出席会員の過半数の同意によりこれを決定し、可否同数の場合は議長がこれを決定する。
6. 次の事項は、総会の議決又は承認を得なければならない。
 - (1) 役員の選任
 - (2) 事業報告、及び当該年度の事業計画に関する事項

(3) 予算、決算に関する事項

(4) 会則及び施行細則の変更

(5) その他、役員会が必要と認めた事項

第12条 役員会及び常任幹事会は、本会の業務を企画、運営し前条に定めた総会の議決を要する事項を除く一切の事項を議決する。

2. 役員会は第5章第6条の役員（計16名）をもって組織し、常任幹事会は幹事ならびに幹事・監査を除く役員（会長、副会長、常任幹事、計6名）をもって組織する。

3. 役員会及び常任幹事会は、会長がこれを召集する。

4. 役員会及び常任幹事会の議長は、会長がこれにあたり、会議を主宰する。

5. 役員会は、役員の過半数の出席をもって成立し、議決は出席役員の過半数の同意を要する。可否同数の場合は、議長（会長）がこれを決定する。

6. 役員会は、次の事項を通常総会において報告しなければならない。

- (1) 事業報告、及び当該年度の事業計画に関する事項
- (2) 予算、及び決算に関する事項

第7章 会 計

第13条 本会の資産は、次の各号をもって構成し、役員会がこれを管理する。

- (1) 会費
- (2) 寄付金
- (3) その他の収入

第14条 本会の会計年度は、毎年4月1日より翌年3月31日までとする。

第8章 支 部

第15条 本会は、役員会の承認を得て必要な地域に支部を置くことができる。支部には代表者を置く。支部代表は会長選挙において一票を有す。

第9章 雑 則

第16条 この会則についての施行細則は、別にこれを定める。

附 則

この会則は、1982年4月1日より施行する。

設立年月日 昭和57年4月1日

2. 1982年12月20日、通常総会において改正
3. 1986年3月29日、通常総会において改正
4. 1991年3月30日、通常総会において改正
5. 1999年5月14日、通常総会において改正
6. 2017年5月19日、通常総会において改正
7. 2018年5月18日、通常総会において改正
8. 2019年8月3日、通常総会において改正
9. 2020年8月1日、通常総会において改正
10. 2024年8月3日、通常総会において改正
11. 2025年8月2日、通常総会において改正

愛媛大学医学部同窓会会則施行細則

(目 的)

第1条 この細則は、愛媛大学医学部同窓会会則に基づき、本会の運営についての細則を定める。

(会 費)

第2条 会員は、下記の通り会費を納めるべきものとする。

2. 正会員及び学生会員の会費（入会金を含む終身会費）は5万円と定める。
3. 特別会員、準会員及び賛助会員の会費（入会金を含む終身会費）は2万円とする。
4. 会費納入方法は別途定める。

(同窓会役員)

第3条 会長は広く本同窓会の正会員（終身会員）から公募あるいは推薦し、役員会（現会長1、副会長2、常任幹事3、監査2、幹事8）ならびに*同窓会地区代表幹事5で投票を行い、過半数を超えない場合は、上位2名による決戦投票の後、過半数を持って選出される。同票の場合は現会長が指名する。会長の任期は3年とし、役員会ならびに同窓会地区代表幹事（半数以上）の承認がある場合にのみ2期6年まで勤めることができる。副会長2名は会長が指名し、役員会の半数以上の賛成をもって承認する。会長を含む全ての役員は満70歳になった時点で定年とし、会長ならびに副会長以外の役員が退会する場合、本人が後任を推薦し、役員会の半数以上で承認する（仮に否決された場合は再度推薦する）。

*同窓会地区代表幹事とは、九州支部、中国支部、近畿支部、東日本支部、東海・中部支部を指す。今後、全国の支部が幹事会の承認の元に増加した場合は、定員5を増加する。

第4条 会則第6条に定める役員のうち、副会長、監査、常任幹事の半数以上は学内の会員よりの選出とする。

(役員会ならびに同窓会総会)

第5条 会の運営を行う常任幹事会（会長1、副会長2、常任幹事3）は必要時に不定期開催とし、役員会（会長1、副会長2、常任幹事3、監査2、幹事8）は4月ならびに、**9月第一週の土曜日**（同日同窓会総会を開催）に開催する。常任幹事会ならびに幹事会の決定事項は同窓会総会の承認（過半数）が必要であり、否決された場合は継続審議とする。会議には、会議録を作成し、出席会員2名の署名を要するものとする。

(会議の運営)

第6条 本会の会務運営のため、次の各部会を置く。

- (1) 庶務部
- (2) 企画部
- (3) 広報部
- (4) 渉外部
2. 各部に部長1名を置き、副会長又は常任幹事のうちから選出する。
3. 各部の管掌する業務は別にこれを定める。

(事務職員)

第7条 本会に事務職員を若干名置く。

附 則

この会員施行細則は**2025年8月2日**から施行する。

2. この細則に定めていない規定は、役員会においてこれを定める。

愛媛大学医学部同窓会 申し合わせ事項

会費納入における申し合わせ

同窓会正会員費は終身会費5万円と定める。

会費は愛媛大学医学部入学時に一括5万円の納入を原則とするが、諸事情で卒業時まで全額納入する事も容認する。また、退学時要望があれば納入金を返却する。2018年5月時点の卒業生で終身会員の手続きが未施行（全額納入していない）のものについては、2019年8月1日までの移行期間と定め、この期間に納入を終えない場合、同窓会正会員と原則認めない。

名簿等に関する申し合わせ

1. 在校生にも会報・名簿を配布する。ただし、会費未納の場合は、会報のみ配布する。また名簿にも在校生を記載する。
2. 名簿に掲載する住所は連絡先とし、自宅・勤務先・その他の連絡先かの選択は会員本人の任意とする。また、電話番号・電子メールアドレスに関しても掲載・非掲載は本人の意思によることとする。
3. 2019年8月以後終身会費を納入していない会員*には名簿を配布しない。
* ここでいう「会費を納入していない会員」とは、終身会費を納めていない愛媛大学医学部卒業生を言う。
4. 終身会費未納入者の卒業生には名簿を配布しないことを明記する。
5. 名簿の配布は終身会員に限り、要望があっても終身会員以外には原則配布しない。
6. 卒業生から要望があった場合、次の場合に限り送付する。
(1) 会費を納めていなかった卒業生が終身会員として会費を納めた場合
(2) 住所不明のため名簿が配布出来なかった終身会員である場合
注：紛失した場合、複数部要望した場合は原則送付しない。

同期会についての申し合わせ

愛媛大学医学部医学科卒業生が同期会を開催するにあたり、次の条件が全て満たされれば愛媛大学医学部同窓会は5万円の援助を行う。

1. 正会員20人以上集まること。
2. 会の写真と報告文を（集会終了後4週間以内に）同窓会に提出すること（会報原稿用）。

3. 開催予定日を事前に同窓会事務局に連絡の上、（集会参加者で）会費未払いの人へ納入のお願いを行うこと。
4. 2年に1回とする。
5. ~~卒後20年まで(20年を含む)とする。~~（削除）

支部に関する申し合わせ

支部立ち上げ時に限り1支部あたり10万円の援助を行う。

注：今後、多くの支部が隣接に設立される可能性があるため隣接支部間で十分な協議を行いそのエリアを明確にする必要がある。

支部が支部総会を開催するにあたり、次の条件が全て満たされれば、愛媛大学医学部同窓会は、10万円迄の援助を行う。

1. 援助金の用途は、開催費用（飲食以外の会場費・講演料・講師旅費）とすること。
2. 総会で会計報告、**支払詳細（振込の写し等）の提示**を行うこと。
3. 開催予定日を事前に同窓会事務局に連絡の上、（集会参加者で）会費未払いの人へ納入のお願いを行うこと。
4. 1年に1回とする。

講演者旅費に関する申し合わせ

1. 愛媛大学医学部同窓会会員が、同窓会の交流・連絡等の目的で出張する際には、バック料金（往復の旅費とシングル宿泊料金）を同窓会が負担し、何らかの理由でバック料金が使用出来ない場合には、往復旅費と一泊15,000円以内のシングル宿泊料金を同窓会が負担する。また、この金額を超える場合、追加料金分は会員自身の負担とする。ただし、特別会員の恩師を招待する場合はこの限りでは無く、この費用については、同窓会長が判断し、役員会で事後に承諾を得ることを原則とする。

この申し合わせ事項は**2025年8月2日**から施行する。

8期生座談会

鍋加) 会長の鍋加です。これより8期生座談会を始めさせていただきます。まず最初に、お一人ずつ自己紹介をお願いしたいと思います。



よつば循環器科クリニック
画像診断センター長
東野 博

東野) 現在よつば循環器科クリニックの放射線科に勤務させていただいています、東野と申します。

阿部) 阿部と申します。20年前によつば循環器クリニックを開院しまして、本日まで院長を務めております。

中城) 中城と申します。令和7年3月31日、砥部病院を定年退職し、執筆業の傍ら、よつばクリニック、黒田病院の非常勤医師として働いています。

金澤) 金澤整形外科の金澤と申します。金澤整形外科を開業して約30年になります。

鍋加) 自己紹介ありがとうございました。それでは皆さんの愛媛大学の学生時代の話をお伺いしようかなと思います。どのような様子でしたでしょうか。

阿部) 僕らの時代はですね、愛媛大学の本学城北キャンパスで1年半～2年足らず、医学とは全く関係ないこと、普通に物理とか数学とかドイツ語とか英語とかを勉強して、それから臨床の研修のために重信の方に引っ越してっていう感じでした。今の学生はそうではなくて、最初から重信で臨床の授業の方が多いと聞いています。

あの1年半が本当に必要だったのか、もっと早く医学の勉強を始めたかったとも思いますが、他学部の人たちと一緒に過ごしたのは良い経験になりました。臨床の方は医学の勉強が面白かったです。

東野) 阿部先生もおっしゃられましたが、教養部はとにかく医学とはあまり関係ない世界でした。自由に過ごしました。医学的に無駄かどうかと言われたらあれですけど、思い出はあります。

中城) 教養は必要だと思います。自分磨きと人間の理解のために、見識を広めることには意義があると思います。ドイツ語の教科書に載っていた「Die Grenzen meiner Sprache bedeuten die Grenzen meiner Welt」(私の言語の限界は私の世界の限界を意味する)という言葉は、今も心に残っていて、時々呟きます。琵琶湖の富栄養化についての講義なんかすごく良かったです。心理学の話も面白かった。あの頃の教養は為になりました。学生生活も楽しかったです。本学の生協の食堂が綺麗で、そこにずっと居座っていた思い出があります。

金澤) 教養課程はほとんど高校の授業の延長のようなものでした。真面目に授業に出席していましたが、特に楽しいとは思いませんでした。先ほど阿部先生がお話されたように、現在の医学部生は1年目から医学を学んでおり、6年間を通してゆとりを持って勉強できているのではないかと思います。私たちは教養の1年半を除いた4年半の間に医学の勉強を詰め込まれていました。同じように大変ではありましたが、期間が短い気がします。現在の学生さんは5年生や6年生の段階で、国家試験に十分対応



よつば循環器科クリニック
院長・理事長 阿部 充伯

できる知識を身につけています。私たちの頃は 6 年生の12月まで講義と試験があり、年が明けてからの3か月間で追い込みをかける形でした。現在のカリキュラムの方がより良いと感じます。



中城総合医学研究所
所長 中城 敏

鍋加) 私は26期生ですが、私の時で1年生の1年間だけ城北キャンパス周辺に住んで、2年生から重信に引っ越す学生が多かったです。当時は1年生のうちは週1回だけ重信で授業でした。だんだん下の学年になるほどにそれが週2回週3回と増えていって、もう今は初めから重信に住むようになっていました。全てのカリキュラムが前倒し前倒しになっていってあるような感じです。勉強する内容も増えて学生たちも大変なんですけれども、最初から重信に行って、あまり街中(松山市内)のことを知らずに育っていったところもあります。先生方は、最初の教養部が1年半ぐらいあったということで、医師としての人間性の形成とかそういったものにはどのような影響がございましたでしょうか。

東野) 医学部の学年は面白い社会だなと思っています。中学高校では同じ年齢が集まっていましたが、医学部では現役だけでなく色々な背景をもつ人たちが集まっていました。そういう入り組んだ社会というのが面白かったと思います。

阿部) 医学部へは最終的に医者になるということを目標に皆入学してきます。中にはモチベーションの低い学生も居るのですが、そういう学生にも僕らの世代が患者さんのために頑張って臨床をしている姿を見せてモチベーションに繋がれたらいいなと思ってずっと臨床をやってきました。

文系と違って授業は必須の科目で埋まっていました。忙しかったですが、やっぱり夏休みとか冬休みは親しい友人と北海道とか沖縄旅行に行ったりとか、お金なかったですけど時間がありました。学生時代に楽しめることは十分6年間でさせてもらったので、他の学部の学生とはちょっと違う濃密な学生時代を送れたかなって感じがします。今からでも戻りたいなっていう気持ちありますよね。

中城) いろいろな年齢の人がいる学年でしたが、他の大学へ行ってから入学した人、浪人した人などがたくさんいて、年齢が違うということは全然気になりませんでした。ところが、8期の同窓会の時、「みんな、50になったけど、これからもがんばろう」と挨拶すると、「お前だけじゃ50になったんは、わしらは48じゃ」という野次が飛び、忘れていた2浪を何10年かぶりに思い出しました。後で、入学までに紆余曲折のあった人たちが私のところに集まり、慰め合いました。

金澤) 教養課程で他学部の学生と交流できたことは、大学生活における大きなメリットだと思います。さまざまな人の考え方を知り、多くの人と知り合えることは、貴重な経験です。教養時代の医師ではない友人の存在は非常に大切でした。現在の医学生は1年目から医学のみを学んでおり、他学部との交流が全くないのは、やや寂しいことだと思います。



金澤整形外科
院長 金澤 慶治

東野) 教養で他の学部の学生と一緒に授業を受けることがありました。他の学部の人たちと交流をして、色々な考え方があるのを知り、面白い経験でした。今の医学生は学ばなければならないことが本当に多くて大変だと思います。教養はなくてもいいとは思いますが、思い出してみると、あったらあったで面白かったなと思います。

鍋加) そうですね。それでは次は専門の話をお願いします。

東野) 留年生が40人もいたので、先生らに迷惑をかけた学年だと思います。40人落ちちゃうと実習の人数の問題があります。1学年の人数がプラス40だと、そのままだと受け入れられない。先生方ははっきりそうは言わないけど、結局30人落とすしかない。そういう影響が何年か続きました。

阿部) 僕はいつも思うんですけどね。何期生はものすごい優秀だとか、何期生は成績悪いとか、必ず教授や講師の先生に言われます。本当に何を根拠に言っとるのかなと思います。例えば国試合格率とかは後になって分かるんです。根拠もないのに、そういうふうなことを学生に言ったらいけないですよね。留年生は多かったのですが、あまり気になったこともなくて、別に問題はなかったです。留年した人は色々言われてかわいそうでした。全然そういう風な違和感はなかったです。

東野) 大体、あの頃講義って、そんなに100%出席してなかったですね。

阿部) どうしても授業を休みたい時は出席した人のノートを借りてコピーしていました。金澤先生は真面目に出席していたので皆10円でコピーして回し読みしていました。

鍋加) 僕らの時はまだギリギリ出席を取ってないぐらいなんですけど、僕らよりちょっと下ぐらいの学年になるともう全部出席取らなきゃいけないという決まりになりました。



東野) 僕らの頃は出席を取っていませんでした。実習も違うグループの人とは交流がないんですよ。ポリクリが始まってしまうと、ポリクリグループ以外の人はほとんど交流がなくなりました。

金澤) 教授の板書は達筆すぎたり、スピードが速すぎてノートを取るのが大変でした。わからない所は、沖田先生、枡屋先生、渡辺修一郎先生にノートを見せてもらい、清書してまとめ直していました。阿部先生が言われてたノートとは、このまとめたノートで、試験前には役に立ったと思います。ポリクリは出席番号順のグループで、口頭試問も同じグループでした。1人答えられれば全員合格するような雰囲気でした。

中城) だから誰と一緒に班になるかが大事でした。

東野) 今はグループ分けはランダムですか？

鍋加) 僕らの頃もグループ分けは出席番号順ではなくて、なるべく成績が均一になるようにしていました。そうしないと、どうしても偏りが出てしまいます。

金澤) 出席番号順でのグループ分けもまとまりがあり、良かったと思います。

中城) 旅行の思い出が色々あります。剣道部で諏訪湖に行きました。剣道部の合宿ではマネージャーがマニキュア持っていましたので、夜、暇なものですから、部員が手の指や足の指に塗りました。マニキュア落としが無いことに気づき、ナイトショップに行きましたが、置いていませんでした。

翌日は小学生との対外試合でした。正座して両手を床について挨拶する時、ピンクの爪がキラキラキラ、いざと立ち上がると足の爪がキラキラして恥ずかしい思いをしました。

金澤) 私達の頃は卒業旅行がない代わりに5年生の夏休みに旅行に行く人が多かったようです。私も仲間3人と車で北海道一周しました。学生時代に友達と一緒に旅行に行くというのは、すごく良い思い出、経験だと思います。今の学生さんは、医師国家試験の時期が早まり、国試後すぐに卒業旅行に行くようですね。

鍋加) そうですね。みんな卒業旅行に行っていますね。僕の時がまだ国試が3月で結果が4月、働き始めが5月とかだったんですけど、今はもうそれが1ヶ月早くなって、4月1日から働けるように国試が2月になっています。卒業式・謝恩会がちょうど真ん中にあるので引っ越しや旅行を優先する学生も多いようです。

さて、学生時代の話を聞いてきた訳ですけども、そろそろ卒業後のお話を聞いていきたいと思います。



東野) 卒業後はですね、私は当時放射線科の濱本研教授に誘われて、放射線科に入局しました。入局者が多くて、9人いました。当時はがんの患者さんを病棟で見て、放射線治療や血管造影で集学的治療をするっていう時代で、今ほど放射線診断と治療だけということではなかったです。皆さんそうだと思うけど、あんまりコンプライアンスのない時代で、とにかく鍛えられたという思い出です。でもそれがあったから今があるということだろうと思います。私はそのまま大学院へ行って、心臓核医学を研究しました。第二内科の先生たちと協力してやってもらえるのが良かったです。大学の中だから協力するのは当然かもしれないですけど、快く研究できました。その後宇

和島社会保険病院へ行っただけですけど、そこで当時としては珍しい心臓MRIをやってみようと思って。やっぱりそこでも愛媛大学の第二内科の先生がいらっちゃって、色々研究させてもらいました。次に県立今治病院へ行って、そこからはとにかく心臓CTの研究開発を本当に寝食を忘れて取り組みました。心臓核医学や心臓MRIはベースがありましたが心臓CTはゼロからのスタートでした。第二内科でも県病院でもよく手伝ってもらいました。いろんなことを研究させてもらって、本当に面白かったと思います。平成10年の愛媛新聞の第1面に愛媛大学で記事が出るっていうのは、やっぱりいいことだと思います。私ら40年前と比べて、今は何が変わったかという、私の領域では心臓CTを狭心症の人にルチンで撮るようになった。あるいはPCI治療なんかすごい進歩しました。他にもいくつかありますが、その開発の中心に愛媛大学がいたっていうのはなかなかすごいことだと思います。ただあの当時は産学複合体なんという概念があまりない時代だった。今だったら一緒に研究して一緒にお金を出して一緒に特許を取ってなのでしょうが。そんな時代じゃなかったから、ただひたすら学会で発表して論文を書いて、メーカーもそれを元に開発してっていう。まあそういうことの一端を担いだのかなというのは良かったかなと思うし、これはもう愛媛大学みんなの力だと思って、本当に素晴らしいことができたかなと思っています。私は大学でずっと仕事をしていて、2011年に縁があって、いち早く心臓CTに興味を持たれていた阿部先生のよつば循環器科クリニックに勤務させていただくことになりました。症例数が多いので研究や学会発表を今でも続けられています。

やっぱり愛媛大学の中でやってきてよかったかなと思います。大きな組織になるとなかなか難しく、愛媛大学だったからこそお互いにコミュニケーションを取れてうまくできました。



阿部) 私はですね、第二内科の国府先生が非常にかっこいい先生だったのと、心筋梗塞とか虚血性心疾患に非常に興味があったので入局しました。その頃、カテーテル手術が世界で始まったものの、愛媛県では施行されてなかった。当時僕らが研修医で大学に入った時期は、心筋梗塞の患者が来てもヘパリンを入れて寝かしてただけ。もうあと何もないんですよ。首からスワングアンツカテーテルを入れて血行動態を見るだけ。血圧を見ながら、ニトログリセリンのチューブを何センチにするかぐらいしかなくて、何回も発作を起こして亡くなったりとか、そういうのを診ていました。学生時代にPTCAとかPTCRの抗血栓薬を流して治療するのが始まったばかり。そういう愛媛県でまだ始まっていない治療を将来的にやりたい、あるいはペースメーカーを入れるような循環器の専門医になりたいという希望があり、国府先生の教室に入りました。愛媛県というのは、昔から循環器心疾患の死亡率が非常に高い。言うなれば健康後進県ですよ。そういうのを何とかしたかった。10年目ぐらいで県病院に行きました。副院長をされていた城先生は、大阪大学の胸部外科の先生だったんですけど、その先生が心筋梗塞に対するPCIを愛媛県で初めてされるということで、そこで勉強させていただき、PCI手術をするようになりました。だから現在まで30年間以上はカテーテル手術をやっています。僕も元は循環器の専門医でもあるんですけども、心臓核医学にも興味がありました。何故興味を持ったかと言ったら、カテーテル手術とは冠状動脈が細かったら施行する、ではなくて、心筋の虚血が証明された部位じゃないと施行してはいけないと思ったから。そのためには心筋シンチをして心筋虚血とか心筋のバイアビリティをちゃんと確認したいということもあって、心臓核医学の専門医試験も一緒に受け取得し、カテーテルインターベンションナリストとの2つを自分のライフワークということで、ずっと今までやり続けてきました。県病院の頃に大病をしまして、医局を辞めて松山市民病院の循環器に移りました。市民病院でも患者さんのPCI手術をしていたんですが、やはり大きな病院でやっているとですね、心臓血管外科との仕切りがものすごく高く大きいというか、気安く紹介できたりとかはなかったです。あの頃はまだハートチームという概念はなくて、やっぱりバイパス手術が第一義でした。難しい手術はもうカテーテル手術治療なんてしても助からないから、さっさと心臓血管外科に紹介した方がいいんだっていうような考え方があったんです。でも世界の潮流で、そういう時代ではなくなった。カテーテル治療がものすごく発展して低侵襲ですから、患者さんも楽だし、急性期も治療開始が早い。バイパス手術を開始するのはスタッフ集めるのに1時間ぐらいかかるけど、カテーテル手術だったらすぐできる。当時日本でもう10施設ぐらいカテーテル専門クリニックが開業していました。循環器内科の自分たちでやろうという考えの先生が結構日本中でいたんですよ。そういう先生方の実際に手術しているところをみんなに放映して、勉強会でdiscussionしながら手術の方針を決めながら手術するというライブにどんどん僕も参加させてもらいました。全国レベルのCCTというライブがあるんですけども、四国で僕が初めて2回ほどオペレーターもさせてもらったりし



ました。NPO法人を作って、中国に3回手術しに行ったりとか、最近ではマンマーの方まで手術を教えに行ったりとか、日本国内外で手術指導をやっています。

いずれにせよ大きな施設でやっている、なかなか自分の意見が通りにくいので、そしたら、もう自分で開業しようということで、2006年によつばを開業しました。その頃お世話になっていた愛媛県立中央病院心臓外科の佐藤先生をお誘いして、翌年から心臓血管外科も一緒に開設して、東野先生も来てもらって、充実したドクター、エキスパートを呼んでですね、まあ現在に至って、20年経ったという感じです。毎年多くの手術を僕は施行していますので、そういう忙しい毎日、なかなかいい充実した生活を送っています。私も年なので何歳までできるかわかりませんが、できるだけ長く自分の好きな道なので頑張っていていきたいなという感じでおります。



中城) 学生時代から第二解剖学教室に出入りしていました。上原教授や小室助教授、出崎先生、いろいろな教室から先生方が来られ、お酒を飲みながら話をするのが楽しみでした。

その頃、神経筋接合部の立体構造を出崎先生が世界で初めて発表され、注目を浴びていました。教室には、世界中から文献請求の葉書がたくさん来ていました。誰かがいい仕事をしたら、お酒を飲んでお祝いするというような雰囲気にも憧れ、学生時代から大学院に至るまで約10年間を解剖学教室で過ごしました。

大学院を卒業する頃、電子顕微鏡を使って研究できる人が欲しいというアメリカの大学からの要請で、米国クリーブランドにあるケース・ウェスタン・リザーブ大学 神経科学部門に留学させていただきました。3年間の留学を経て、帰国後、第3内科に入局しました。

金澤) 昭和61年3月に大学を卒業後、1年間大学病院で研修を行い、翌年には徳島の鳴門病院で研修医として勤務しました。当時、鳴門病院は、「研修病院として最も忙しい」と言われており、連日多くの患者さんに対応する現場は、まさに実践の連続でした。現在の働き方改革とは大きく異なり、朝から夜11時過ぎまで働く日々が続く、土日や祝日も病院に出勤していたのを覚えています。大変ではありましたが、臨床医としての基盤を築く上で、この上ない経験となりました。特に印象に残っているのは、ルーズショルダーで有名な遠藤寿男先生のご指導です。遠藤先生からは「手術に頼らず、いかに保存的治療を行うか」という姿勢を学びました。リハビリや生活指導を通じて患者さんを全人的に診ることを教わり、現在の私の診療スタイルの根幹となっています。その後は大学院に進学し、関節リウマチの研究に取り組みしました。細菌学教室の内海教授のもとで、研究の厳しさと奥深さに触れながら学位を取得させていただきました。大学院終了後は、三原興生総合病院や砥部病院で臨床経験を積み、平成7年8月9日に松山市小村町で「金澤整形外科」を開業いたしました。開業当初から診療所としては珍しかったMRIを導入しました。MRIによって早期診断が可能となり、病気の見逃しを防ぎ、迅速な治療につなげることができ、地域医療に貢献できたと考えております。

一方で、私自身も年齢とともに体調を崩すことがありました。2017年6月には外痔核の手術を受けた後に大量出血を起こし、救急車で搬送される経験をしました。同年8月には腰部脊椎管狭窄症の手術も受けました。整形外科医である自分が患者の立場となり、手術やリハビリを経験したことで、「どういう時に痛いか」「どうすれば楽になるか」を身をもって知り、患者さんに具体的に伝えられるようになりました。これは大変貴重な経験となりましたが、現在も腰痛は残っています。現在は大学から脊椎・膝関節・股関節の専門の先生方に応援に来ていただき、当院で対応できない治療や手術に関しては大学と連携しながら診察を行っております。同期会については、かつては不定期に開催していましたが、同期で親友の伊賀耕三先生が癌で亡くなられた

ことをきっかけに、東野先生から「年に一度集まりたい」という声が上がりと、平成21年から毎年夏に定期開催するようになりました。私は松山におりますので、自然と幹事のような立場で会長役を務めさせていただいています。コロナ禍で一時中断した時期もありましたが、今年で通算14回目の開催になりました。年齢を重ねるにつれて、同期会では「自身の健康」や「親の介護」「子供のこと」と「定年後の生活」などが話題の中心となってきました。こうした人生の節目を語り合える機会は大変貴重であり、できるだけ多くの方に参加していただきたいと思っております。往復はがきを毎回120通ほど送付していますが、なかなか返事が戻ってこないこともあります。返信をくださる先生方は決まっております、返事も出欠も不明のままという先生方も少なくありません。それでも毎年参加して頂く先生方もおりますので、今後の同期会のあり方については引き続き相談していきたいと考えています。今回のように、話し合える場をいただけたことを大変ありがたく思っております。本日は、このような機会を与えていただき、ありがとうございました。



鍋加) 今お話聞くと8期生は14回も同期会をされているということで。なかなかその仲のいい学年と言いますか。

東野) 今金澤先生がおっしゃいましたけど、40歳代後半の年に西条で開業されていた整形外科の伊賀先生が急逝されたんですよ。私はその伊賀先生と中高からずっと同級生でした。そのとき8期生の仲間と連絡の取りようがありませんでした。皆さんおそらく卒業してから、まっしぐらに勉強して、30歳代40歳代なんて集まってくれないと思うんですよ。ちょっと困ったなっていうんで、伊賀先生の最後の時に金澤先生と一緒に話しながら、これはやっぱり1回集まって、連絡網も作って、せめて訃報はみんなに言えるくらいの関係はあった方がいいんじゃないかということをお願いして集まってもらって。本当にたくさん集まってくれました。そういう時に、同級生で調子が悪いんだったら、その専門の誰かちょっと相談してもいいだろうし、もし胸が痛かったら、阿部先生に相談したらいいだろうし、そういう助け合いもできたらなと思って。そういうことが継続できたらなと思って、あと金澤先生にずっと頑張ってもらっているという状況ですね。



鍋加) 先程、120枚往復ハガキを出されるっていうのは、金澤先生がその担当でされてる。やっぱりこういう中心的な人物がいるのはすごいいいですね。

金澤) 8期生の名簿を作成しており、同期会に参加された先生には名簿をご覧いただき、新しいメールアドレスなどを書き込んでいただいております。

鍋加) 宛先不明の方の勤務先を調べて同窓会報を送るという作業をしておりましたが、同窓生の増加により作業量が増えたため昨年から宛先不明者については追跡調査をすることを辞めました。徐々に届かなくなっていくと思います。



今はどうしても個人情報保護の問題もありますし、本部で全部の名簿を持っているのも安全性の問題ももちろんありますし、何よりも事務作業が大変です。出来れば学年ごとにそういう名簿を持ってもらって、例えば代表の方に何月何日に何々のイベントがありますと伝えたら、その学年に伝わるぐらいのシステムが良いかなと私は思っています。年齢も幅広いので、学年ごとに紙の名簿だったり、メーリングリストだったり、Facebookグループだったり、LINEグループだったりしても良いと思っています。今日は貴重な時間ありがとうございました。

愛媛大学医学部同窓会会員の皆さまへ

ドクター総合補償制度 医師賠償責任保険 (勤務医向け)

日本国内で行った医療業務による患者の身体の障害が保険期間中に発見され、被保険者が法律上の損害賠償責任を負担した場合に、損害賠償金や訴訟費用・弁護士費用等の諸費用に対して保険金をお支払いする保険です。



団体割引が適用され割安な保険料

医学部同窓会による団体契約につき 一般契約より **10%割引** でご加入いただけます！

国内の勤務であればどこでも補償対象

所属先に変更があった際も日本国内での医療業務であれば補償対象となります。
(例) 愛媛県立中央病院 → 東京医療センター 国内勤務のためいずれも補償対象となります！

中途加入も可能

毎月1日を補償開始日として中途でもご加入いただけます！

(例) 10月16日加入手続き⇒11月1日午後4時から補償開始
中途加入の補償期間 : 加入手続きの翌月1日午後4時～R8年3月1日午後4時まで
中途加入の締切日 : 毎月末日

このチラシは勤務医師賠償責任保険の概要についてご紹介したものです。保険の内容はパンフレットでご確認ください。詳細は契約者である団体の代表者の方にお渡しする保険約款によりますが、ご不明な点がございましたら、取扱代理店または引受保険会社までお問い合わせください。

本件に関するお問い合わせ先

<取扱代理店> 株式会社第一成和事務所
〒103-8214 東京都中央区日本橋馬喰町1-12-3

☎ 0120-100-492 ✉ seiwa@d-seiwa.co.jp

<引受保険会社> 東京海上日動火災保険株式会社 担当課:公務第二部 文教公務室
〒102-8014 東京都千代田区三番町6-4 ラ・メール三番町10F
TEL (03) 3515-4133



東京海上日動

2025年 8月作成 24TC-001704

海外医療研修に参加して

■ 木下 輝来 (4年)

(中央)

2024年5月、モンゴルで実施された5日間の「ハートセービングプロジェクト」に参加する機会を得て、小児を対象とした心臓エコー検査に取り組みました。私は医学部3年生として、主にドンドゴビ県やゴビスンベル県の地域検診に同行し、検査の実施および補助を担当しました。現地では、薬さえあれば治療可能な疾患があるにもかかわらず、薬が手に入らない、あるいは手術可能な症例にも外科医が不在であるといった、厳しい医療資源の現状に直面しました。そうした中でも、現地の医療従事者たちは限られた設備と人員で、救える命を一人でも多く救おうと日々懸命に努力しており、その姿勢に深く感銘を受けました。日本の医療環境がいかに恵まれているかを実感するとともに、自分の将来の進路や役割について真剣に考える貴重な機会となりました。私も将来医師として再びこのプロジェクトに参加し、より広い地域での支援活動に貢献したいと強く思うようになりました。この経験を通じて、医師としての志がさらに明確になり、帰国後の勉強への意欲が大いに高まりました。

最後に、ご支援・ご尽力頂きました先生、同窓会の皆様、国際化推進室の皆様に心より感謝申し上げます。



■ 小関 悠太郎 (5年)

(右側)

2024年5月2日から6日までの5日間、モンゴル・ハートセービングプロジェクト（HSP）に同行し、研修を行いました。HSPは、現地の医療水準では救うことが難しい先天性心疾患の子どもたちを救うべく、日本から医師団を派遣し、現地医師と協力して検診やカテーテル治療を行ったり、技術指導を実施するプロジェクトです。現地到着後、チームはカテーテル治療を担当するカテーテル班と、地方を巡回して子どもたちに心エコー検査を行う検診班に分かれ、私はカテーテル班に帯同しました。

カテーテル班には日本各地からトップレベルの小児循環器専門医が参加しており、先天性心疾患とその治療について直接ご指導いただけたことは、非常に貴重な経験でした。また、現地スタッフや患者さんとの交流を通して、言語の壁があっても医療という共通の志があれば心が通じ合うことを実感し、今後の医療人としての在り方を見つめ直す契機となりました。

お忙しい中ご指導くださった先生方、研修に関わってくださったすべての皆様、そしてご支援いただいた同窓会の皆様に、心より感謝申し上げます。



■ 中野 億 (1年)

(右端)

私は2025年4月26日から5月2日の1週間、Heart Saving Project（HSP）のモンゴル医療支援活動に参加させていただきました。

今回の支援活動では、5日間で106件のエコー検査と14件のカテーテル治療を見学し、動脈管開存症や心房中隔欠損症の閉鎖治療を間近で見ることができました。また、3日目にはSHINE MONGOL HARUMAFUJI SCHOOLにおいてエコー検診と校内見学、そして日馬富士校長との対談をし、日馬富士校長のお話と生徒たちの明るく元気な姿にたくさんの元気をもらえ、今回の活動における大きな力となりました。

今回の活動全体を通して、医療物資の多くない場所での治療の難しさについて考えることが多かったです。難しい治療に臨む先生方を見て、日本とは異なる環境と限られた物資で患者さんにとって一番の選択をすることは、膨大な知識と経験、高い技術だけでなく、慎重さと勇気も必要であることを学びました。また、日本では滅多に見られないという症例も実際に見ることができ、非常に貴重な経験をすることができました。

最後に、今回大変お世話になったトーヤさんをはじめとするHSPモンゴリアの皆さま、檜垣先生をはじめとする日本の先生方、そしてご支援いただいた同窓会の皆様に深く感謝申し上げます。



2025年4月26日から5月2日の約1週間、モンゴルでのHeart Saving Project (HSP) というモンゴルで先天性心疾患の子供たちを救うための活動に見学参加させていただきました。

私は主に心臓エコー検診および心臓カテーテル治療を見学させていただきました。エコー検診では短時間で多くの患者を診断しつつモンゴルの先生に指導をするためにポイントを絞って効率的に検査をされていたのが印象に残っています。

心臓カテーテル治療ではPDAがアイゼンメンジャー症候群にまで進行している重症例を目にしました。日本であれば新生児期に発見され早期治療が行われるような症例でも、モンゴルでは検診体制が整っておらず発見が遅れてしまいます。また機材が不足していたりCTデータが破損していたりと、医療以外の問題にも直面しました。こうした環境の中でも、日本とモンゴルの先生方が言語や文化の壁を越えて協力し合い、患者に最善の治療を提供しようとする姿に感動しました。

HSPに参加することで国際医療の雰囲気を知ることができたのは大きな意義がありました。今回の経験を活かし、今後も勉強を続け、HSPの先生方のような医師を目指して努力していきたいと思います。

最後になりましたが、HSPの先生方をはじめ、HSP Mongolia、国立母子保健センター、モンゴル日本病院、新モンゴル日馬富士学園、国際化推進室の皆様、またご支援いただきました同窓会の方々に心より感謝申し上げます。本当にありがとうございました。



医学祭を終えて

第47回愛媛大学医学祭実行委員長 香取 慈

(医学部医学科4年)



5月17日・18日の2日間にわたり、第47回愛媛大学医学祭を今年も開催させていただきました。両日とも天候が危ぶまれましたが、予定通り無事に開催することができ、大変嬉しく思っております。

まず、医学祭の開催にあたり、ご理解とご協力を賜りました教職員の皆様、近隣住民の皆様をはじめ、多くの方々に厚く御礼申し上げます。

今年はテーマを「CYCLE」とし、これは愛媛大学医学部の基本理念である「患者さんから学び、患者さんに還元する」という考え方に基づき、医学祭に関わるすべての方々にとって有意義な循環が生まれるように、という願いを込めたものです。

医学祭本番では、私たち自身もこの「CYCLE」の一員として多くを学び、支えられていることを強く実感いたしました。医学祭を通じて少しでもそれを皆様に還元できていれば幸いです。

今年度は、新型コロナウイルス感染症による各種規制が解除されたことを受け、ゲストライブに「ねぐせ。」さんをお招きしました。武道館公演やMONSTER baSH出演などの実績を持つアーティストを迎えるのは初の試みで、不安もありましたが、結果として会場を大いに盛り上げていただきました。

特に印象的だったのは、「ねぐせ。」のライブタオルを巻いた方々が、バザーやステージ発表にも足を運び、普段であれば関わる機会の少ない層の方々とも医学部の活動が交差したことです。まさに新たな「CYCLE」がその場で生まれているのを目の当たりにし、感激いたしました。

サークルバザーでは、行列ができるほど盛況なサークルもあり、終始活気に満ちていました。ステージ発表では、日頃の活動の成果が存分に発揮され、会場全体が一体となって盛り上がりました。その他の各企画にも多くの方々に足を運んでいただき、心より嬉しく思っております。

最後に、この2日間を大きな問題もなく無事に終えることができたのは、ひとえに多くの皆様のご支援とご協力のおかげです。第47回愛媛大学医学祭にご尽力いただきましたすべての皆様に、実行委員一同、心より感謝申し上げます。

2025年度同窓会役員

役 職	氏 名	卒業年(期)	所 属
会 長	鍋 加 浩 明	H16 (26)	松山大学 薬学部 医療薬学科
副 会 長	須 賀 義 文	H16 (26)	すがクリニック 消化器内科・婦人科
	中 林 ゆ き	H26 (36)	法医学
常 任 幹 事	藤 山 幹 子	H元 (11)	四国がんセンター 皮膚科
	日 浅 陽 一	H 2 (12)	消化器・内分泌・代謝内科学
	西 村 隆	H 4 (14)	附属病院 循環器病センター
監 査	檜 垣 高 史	S63 (10)	小児・思春期療養学
	吉 田 素 平	H11 (21)	消化管・腫瘍外科学
幹 事	上 甲 康 二	S56 (3)	済生会西条病院 内科
	大 谷 敬 之	S63 (10)	星の岡心臓・血管クリニック
	羽 藤 直 人	H元 (11)	耳鼻咽喉科・頭頸部外科学
	熊 木 天 児	H 7 (17)	附属病院 総合臨床研修センター
	濱 田 信	H 7 (17)	四国がんセンター 感染症・腫瘍内科
	山之内 純	H 7 (17)	附属病院 輸血・細胞治療部
	鈴 木 純	H 8 (18)	附属病院 医療安全管理部
	白 野 倫 徳	H14 (24)	大阪市立総合医療センター
事 務	池 内 佳代子		

「2025年7月末日時点の役員」

医学部課外活動紹介

愛媛大学医学部 陸上競技部

代表 大田 直樹(医学科3年)

こんにちは、愛媛大学医学部陸上競技部です。現在、男子7名、女子9名の計16名で活動しており、週3回、砥部総合運動公園やツインドームを拠点に練習に励んでいます。毎年8月に行われる西医体での上位入賞を目標に、初心者から経験者まで互いに切磋琢磨しながら汗を流しています。コロナ禍による制限がなくなったことで、より自由に活動の幅を広げられるようになり、練習にも一層活気が戻ってきました。普段の練習内容は多岐にわたります。体力や瞬発力を高める走り込み、爆発的な力を鍛えるウエイトトレーニング、フォームの改善やスピード向上を目的としたマーク走やドリル練習など、それぞれの競技特性に応じてメニューを工夫しています。練習中にマネージャーに動画を撮ってもらい、改善点を共有するなど、互いに学び合う姿勢を大切にしています。単に体を動かすだけでなく、どうすれば効率的に力を発揮できるかを考え、知識と実践を結びつけることも意識しています。その成果もあってか、今年8月に鹿児島で開催された西日本医科学生総合体育大会では、多くの部員が準決勝や決勝に進出し、表彰台に上がることもできました。自己ベストを更新して喜びを分かち合った者もいれば、悔しい結果に終わった者もいましたが、それぞれが次の課題を見出す貴重な機会となりました。特に、初めて大舞台を経験した1年生にとっては、大きな刺激となり今後の成長につながる大会となったと感じています。今後はこの経験を糧に、さらなる記録向上とチーム全体でのレベルアップを目指して努力を重ねてまいります。部員一人ひとりの目標は異なりますが、声を掛け合いながら練習を続けることで、仲間とともに成長していけるのが陸上競技部の強みだと思っています。最後になりますが、日々このように部活動に打ち込むことができるのは、顧問の熊本先生をはじめ、OB・OGの皆さまのご支援のおかげです。未熟な点も多々ありますが、部員一同、感謝の気持ちを忘れず活動してまいります。今後とも変わらぬご指導とご協力を賜りますよう、心よりお願い申し上げます。



愛媛大学医学部 ダンス部

代表 山下 美鈴(医学科2年)

ダンス部は現在女子35名、男子3名の計38名で活動しています。大学からダンスを始めた部員、長くダンス経験のある部員など様々ですが、お互いに刺激しあって高め合っているように感じます。活動としては、部室で行う基礎練習に加え、イベントに向けてのユニット練習があります。愛媛大学本学や近隣大学の文化祭、地域のお祭りに参加させていただき、それら各地の舞台で最高のパフォーマンスができるよう努力しています。

2月には西医体が大阪で開催され、医歯薬の学部にも所属する方・医療従事者の方などが集まり、1年間の集大成を披露します。他の部活のように優勝準優勝などの順位はつきませんが他大学のショーケースを見て、共に盛り上がり、技術を吸収することができる大変貴重な機会です。2025年に行われた西医体では、コンテスト枠やアフターパーティーでの作品披露など、今までにない新しい挑戦をしました。その場でダンサー同士が繋がり、互いを称え合い、その後の活動にも良い影響を与えました。5月の医学祭では昼と夜のステージがあり、生徒だけでなく教授や親御さんの前での発表だったため、他のステージとは違った緊張感がありました。そのステージを見て入部を希望してくれた生徒もいて、私たちも今まで練習をしてきて良かったと感じることができました。

毎年誘っていただけるイベントもあり、そこで安定したパフォーマンスをすることはもちろんですが、自分たちから行動して新しいものを掴めるように活動していきたいです。このように不自由なく活動できるのは、顧問の先生はじめ、OB・OGの方々の支えのおかげです。引き続き楽しむことを忘れず自分たちの技術を磨いていきます。今後ともよろしく願い申し上げます。



医学部課外活動紹介

愛媛大学医学部 フットサル部

代表 桑原 幸佑 (医学科3年)

こんにちは。愛媛大学医学部フットサル部です。

私たちの部は創部してまだ数年と歴史は浅いですが、現在は学年を問わず約10名の部員が在籍し、週に2回、愛媛大学医学部体育館で活動しています。授業や実習で忙しい日々の中でも、フットサルを通して学年間の交流を深めながら活動を行っています。

昨年度は「第1回西日本医科大学フットサル選手権大会」に出場し、予選を突破して本戦に進出、第8位という結果を収めました。他大学との練習試合の機会も増え、互いに切磋琢磨しながら実力を高めているところです。

部の雰囲気は非常に和やかで、上級生が下級生に技術面や動き方を丁寧に教えるなど、学年間の交流が盛んです。初心者も経験者も分け隔てなく共に汗を流し、真剣に取り組みながらも笑顔の絶えない練習風景が日常となっています。部員一人ひとりが自分のペースで成長できることも、この部の大きな魅力です。

今後はさらなる飛躍を目指し、技術や体力を磨くだけでなく、チームとしてのまとまりをより強固にしていきたいと考えています。これまで支えてくださった先輩方の存在に心から感謝しつつ、その思いを受け継ぎながら活動を続けてまいります。今後とも、温かく見守っていただけますと幸いです。



愛媛大学医学部 アルティメット部

代表 吉本 仁 (医学科3年)

こんにちは。愛媛大学医学部アルティメット部です。

私たちは現在、男子14名・女子8名の計22名で、週2回、医学部グラウンドや近隣のグラウンドにて活動しています。創部2年目とまだ若いチームですが、大会での上位入賞を目標に、日々練習に励んでおります。

「アルティメットって何?」と思われる方も多いかと思います。アルティメットとはフライングディスク（いわゆるフリスビー）を用いた競技で、アメリカンフットボールやバスケットボールに似た要素を併せ持ちます。コート両端のエンドゾーンでパスを受け取ると得点となりますが、ディスクを持ったプレイヤーは走れないため、味方との連携や位置取りが重要です。また、審判を置かずセルフジャッジで進行するため、フェアプレーの精神とコミュニケーション能力も求められます。身体接触は禁止されており、安全に誰でも楽しめる点も魅力の一つです。

このような競技特性に惹かれ、私たちも少しずつ成長してきました。その成果の一端として、先日、鹿児島県で行われた大会に医学部チームとして初めて単独で出場し、幸運にも組み合わせに恵まれたこともあり、4位入賞という結果を収めることができました。今後はさらに力をつけ、より良い成績を残せるよう努力を重ねてまいります。

最後になりますが、部の設立と継続ができてるのは、OB・OGや後援会の皆さまの温かいご支援のおかげです。心より感謝申し上げます。今後ともご指導・ご支援のほどよろしくお願い申し上げます。



医学部課外活動紹介

愛媛大学医学部 Orange Cross

代表 村上 孝仁(医学科3年)

こんにちは。救急医療サークルOrange Crossです。

現在、男子33名、女子42名、計75名で活動しています。毎週金曜日に集まり、BLSの練習をはじめ、エコーや心電図の読影、トリアージ実習、縫合や結紮など幅広い内容に取り組んでいます。また、佐藤先生のご厚意により、ドクターヘリや救急外来を見学させていただきました。現場の空気を直接感じることで救急医学への関心をさらに深めることができ、学びを臨床に結びつける大変貴重な経験となりました。

さらに私たちは地域への貢献にも力を入れています。「愛媛大学BLSプロジェクト」として県内各地でワークショップを開催し、愛媛県におけるBLS普及率や救命率の向上を目指しています。学生が自らの学びを地域に還元できるこのような活動は、サークルとしても大きな意義を持つものだと感じています。

昨年度は全国BLS選手権大会において、他大学の学生と混合チームを組んだ部員が全国1位という成果を収めました。また、心電図検定でも1級・2級の合格者を輩出し、日頃の学習を成果として示すことができました。さらに、初めてのOB・OG会を開催し、現役生から活動報告を行うとともに、先輩方からは医療現場でのご経験を踏まえたミニ講義をしていただきました。救急医療の魅力と責任を改めて実感する、大変意義深い機会となりました。

今後も「楽しく学ぶ」姿勢を大切にしながら知識と技術を磨き、活動をさらに充実させていきたいと考えています。最後になりますが、このように日々の活動を続けられるのはOB・OGの先生方の温かいご支援のおかげです。先生方が築いてこられた伝統と意思を受け継ぎながら、これからも一層努力してまいります。



愛媛大学医学部 軽音楽部

代表 葛本 廣資(医学科3年)

こんにちは愛媛大学医学部軽音楽部です。軽音楽部は現在56名で活動しております。私たち軽音楽部は、決まった練習日はありませんが、定期的に学内でライブを開催し、日々の練習の成果を披露する場として活動しています。昨年から特に、学内にとどまらず、他大学の学祭や外部のライブにも積極的に参加するようになりました。普段とは異なる環境で演奏することは大きな挑戦ですが、聴いてくださる方々の反応や雰囲気から多くを学ぶことができ、私たちにとって大きな経験となっています。さらに今年は、愛媛大学が主幹校となり、四国四県の大学の軽音楽部が協力し合って「四国ジャム」というライブイベントを開催することができました。各大学の演奏を間近で体感することは、自分たちにとって強い刺激となり、より良い演奏を目指して努力するきっかけになるため、非常に貴重な機会であると感じています。私たちはこれからも部員同士で協力し合い、音楽という共通の趣味を楽しみながら練習に励んでいきたいと思ひます。そして演奏技術の向上だけでなく、音楽の楽しさを大切にしながら活動を続けてまいります。

最後になりますが、私たちがこうして部活動に真剣に取り組むことができるのも、これまで支えてくださったOB・OGの先生方のおかげです。先輩方のご支援とご協力に心より感謝申し上げます。今後とも温かいご指導、ご声援を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。



第41回愛媛大学医学部同窓会総会を開催しました

2025年8月2日16時より、松山市・リジェール松山ゴールドホールにて、第41回愛媛大学医学部同窓会総会を開催しました。

- # 1. 2024年度(同窓会活動)会計決算ならびに
2025年度予算案の承認(審議事項)
- # 2. 2024年度同窓会の活動報告(報告事項)
- # 3. 医学部創立50周年記念建物新営工事について
- # 4. 2025年度同窓会の活動(審議事項)
- # 5. 同期会への支援について(報告・審議事項)
- # 6. その他(報告・審議事項)

に引き続き、特別講演(下記1、2)を開催。

- 1. 鶴沼 香奈先生(愛媛大学医学部26期生)
東京科学大学 医学部 法医学講座 教授
演題 「なぜ法医学に？」
～教育・研究・社会貢献のはざままで～
- 2. 阿部 充伯先生(愛媛大学医学部8期生)
よつば循環器科クリニック 院長
演題 「循環器カテーテル専門クリニック開設20年目の現状」



毎年9月第1土曜日、同窓会総会を開催します。

2026年9月5日(土曜日)もどうか皆様ご参加下さい。
各学年(期)同窓会との同日開催もお考え下さい。

33期生同期会 報告

今年2月、33期生同期会をANA ホテル松山にて開催しました。37名参加し、3連休ということもあり約半数は県外からでした。約20年前に高校同期会を開催した際はハガキ送付など大変だったのですが、今回は幹事の私も東京から、会場予約から参加者の事前支払いまで携帯だけで完結でき、便利な時代を感じました。伊予銀行東京支店で同窓会援助を受けるために33期代表口座を作成する際に受けた、振込詐欺かのような警戒の目と質問責めにも時代を感じましたが…。



同期会には解剖教室元教授の松田先生をお招きしました。当初、先生は誰を覚えているか心配だったのですが、学生時代は大変お世話(ご迷惑)になった学年でしたので当時のエピソードを聞いてすぐに思い出され、懐かしがってくださいました。次回もぜひ先生をお招きしたく、その際には今回参加できなかった3S君たちは必ず参加(謝罪)すべきです。また、同期会では一人ずつ近況報告を行いました。卒業以来で会う方もいましたが、話を聞くと一気に14年分の距離が縮まったような思いで、再会の喜びを実感しました。2次会以降は各々で楽しみましたが結局、夜12時には医学生の愛する辛めんや枳元に25名ほど集まり、同期会に参加できなかった人にもそこで再会し、さらに喜びが増しました。

末筆ながら、同窓会から5万円援助をいただいたことに感謝申し上げます。会費の一部や、まっちゃんじゃんけん大会賞金(1位はいつも強運ゴルゴ)として活用しました。参加できなかった同窓生にも友人を思い出していただきたく、内輪ネタが多いことはご容赦ください。きっとまた数年後に同期会を実施します。今回参加できなかった同窓生との再会にも思いを馳せながら、筆を置かせていただきます。

(文責 中野 真禎)

11期生同期会 報告

令和7年2月23日(日)15時からANA クラウンプラザホテルにおいて第11期+α還暦同窓会を開催しました。昭和58年度入学、平成元年卒業のほか、一緒に入学でなくても、一緒に卒業でなくても、一緒に勉強したことあるよね～という人たち150人程に声をかけて、71名という参加者で大いに盛り上がりました。中田達広さんが当時の写真を集めてスライドショーを作成(本当は娘さんが作成)し、参加の叶わなかった佐藤俊哉さん、戸田千さん、宮崎龍彦さん、谷口良彦さん、渡邊剛さん、安田(永原)冬子さんのビデオレターがあり、吉岡(宇埜)敏子さんのマトリョミン演奏あり、最後は藤山泰二さんが1. 2. 3ダーで締めました。その流れで2次会も64名の参加でした。どんなに偉い人になってもあの頃のそれぞれのやらかしは皆の心の中にしまっておきましょう。



(文責 樋口 志保)

27期生同期会 報告

令和7年4月26日土曜日、松山市内の居酒屋で27期同窓会を行いました。県内外から20名の参加がありました。卒後20年という節目の年を迎えた私たち。コロナウイルス感染症流行の影響により7年ぶりの開催となり、中には前回の同窓会は参加ができず、10年以上ぶりに愛媛に戻ってきたという人もいました。どれだけ月日がたっても、どれだけ離れていても、昨日も一緒に遊んだ…もとい、一緒に「学んだ」かのように、いつも通り安心して過ごせる旧友たちでした。これから医師人生の後半を過ごす私たちですが、変わらず支え合える存在であると、改めて感じた同窓会となりました。



今回の同窓会開催をきっかけに、同期のLINEグループを立ち上げました。次回の同窓会はもちろん、もっと気軽に継続的に近況報告をしたり集まったりできればと思います。

(文責 桑原 淳)

第23回愛媛大学医学部同窓会東日本支部総会報告

第23回愛媛大学医学部同窓会東日本支部総会は令和7年1月25日に、例年通り第4土曜日に15名の参加でリモート開催しました。

今年2025年はへび年で、殻を破って成長して、変化と再生する年です。当同窓会は、ワクワクする楽しい目標をつくること、同窓生が無理なく世界貢献を意識できる環境をつくること、愛媛県下や日本の有力者が母校のために尽力してくれる土台をつくる年だと思います。

私は8期生入学で、9期生卒業です。医療において経営はとても大切です。私の経営する病院と老健は従業員360名ですが、医療法人としては従業員が4000人になります。その大きな集団で利益を10%以上出す秘訣など、関心のある経営者には共有できる環境も作りたいと思います。

さて、第23回愛媛大学医学部同窓会東日本支部総会は、24期生の荒木知子先生に幹事と司会をお願い致しました。

教員講演1は、埼玉医科大学国際医療センター呼吸器内科准教授の今井久雄先生より肺癌薬物療法の学術講演がありました。立派な英語論文を執筆され、肺癌薬物療法の進歩と限界を話されました。確実に5年生存率は改善していますが、根治は難しいとのことでした。今後、今井先生がさらに集学的な根治療法を確立されるのを期待したいと思います。

埼玉医大は愛媛大学医学部の1年前に創立されました。医学生の方費は愛媛大学医学部生の10倍以上であり、国家試験合格率も高いそうです。2/3に埼玉医大本院で卒業生教育研修講義を行いました。宇和島に大学病院ができたようなイメージを持ち、驚きました。

教員講演2は、26期生で同窓会第7代会長となられた松山大学薬学部医療薬学科教授の鍋加浩明先生から、「愛媛大学医学部同窓会の歩みとこれから」をお話し頂きました。同窓会執行部も鍋加先生のご友人でかためて、とても若返りました。若い同窓生が集まる、エネルギー溢れる同窓会運営を期待しています。組織の活性化には、よそ者、若者、馬鹿者が必要です。全国5支部会も微力ながら協力したいと思います。

来年は第24回開催ですので、24期生の荒木先生に当番幹事を継続して頂き、同窓の脳神経外科教室新教授やトラブル病院を回復させた循環器科の副院長先生にお話し頂く予定です。令和8年1月24日土曜日に都心にお集まりください。

(文責 東日本支部会長 酒向 正春 9期)



第4回愛媛大学医学部同窓会東海・中部支部総会報告

第4回東海・中部支部総会を令和7年2月1日、JPタワーの名古屋市立大学ミッドタウン名駅サテライトにて開催しました。今回は21名の参加があり、教育講演は藤田医科大学麻酔・集中医学講座の山下千鶴臨床教授(11期)と名古屋市立大学医学部東部医療センター耳鼻咽喉科の讃岐徹治教授(17期)にお願いしました。山下先生には「診療ガイドラインの作成と臨床での活用」と題して、ガイドライン作成のノウハウと楽しさ、苦労話を、また讃岐先生には「声を変える治療の開発」と題してご自身が開発したチタンブリッジを用いた痙攣性発声障害の新規治療を紹介いただきました。総会・講演会の後、和食レストラン「嘉鮮」にて懇親会を開催し、学生時代の思い出に花を咲かせました。

次回は、令和8年2月28日(土)16時から同じ会場で愛媛大学医学部同窓会新会長の鍋加浩明教授(26期)と名古屋市立大学看護学部 精神保健看護学分野の谷向仁教授(17期)にご講演をいただく予定です。東海3県で初期研修、専門研修を行っている愛媛大学卒業生の皆様、是非ご参加ください。

尚、問い合わせは大石久史 hoishi@med.nagoya-cu.ac.jp(052-853-8109)へ。お待ちしております！

(文責 東海・中部支部 事務局長 大石 久史 18期)



第19回愛媛大学医学部同窓会九州支部総会報告

さて、今年も愛大医学部九州同窓会を7月26日博多都ホテルの魚蔵で行いました。今年は1期生から19期生の12名の出席で開催しました(体調不良で急遽1名欠席)。福岡県より10名、大分県より1名、熊本県より1名、鹿児島県より1名の計13名の予定でした。

まず、1年間の経過報告、会計報告などを行いました。

その後、1期生の高橋先生の乾杯から宴が始まり、和気藹々と対馬のノドクロや呼子のヤリイカの活造りなどに舌鼓を打ち、来年の再会を誓いお開きとなりました。来年は大事な20回の同窓会で7月25日の予定です。

1期生の高橋先生は、71歳ですが、現在も、やました甲状腺病院で外科医として、手術をこなしておられるとの事、また、4期生の村上先生は、野口病院の名誉院長にて活躍されているとの事、お忙しい中、出席していただきありがとうございます。その他の皆さんもありがとうございます。九州支部会は山口県から沖縄県と広範囲です。なかなか博多までは遠方とは思いますが、今後の同窓会の参加をお願いします。

物価上昇によりホテル使用料の値上げで講演会用のホテルも確保できず、非常に困っております。愛媛大学医学部九州同窓生の皆さんご理解の上、参加よろしくお願いします。



事務局 すみい婦人科クリニック(福岡市)
愛媛大学医学部同窓会九州支部長

澄井 敬成(8期生) sumiifc@k9.dion.ne.jp
角 典洋(2期生)

(文責 角 典洋 2期)

《会員の個人情報に関する取り扱い》

愛媛大学医学部同窓会は、会員の個人情報の保護と適正な取扱いに取り組んでまいりますので、皆様のご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

1. 個人情報の使用目的

同窓会が取得した個人情報は、以下の目的に使用されます。

- ・同窓会名簿の作成
- ・定期的刊行物(会報、名簿)の送付
- ・同窓会会費徴収のための業務
- ・事務連絡及び各種文書の送付
- ・支部会の行事開催に関する事務連絡及び各種文書の送付

2. 個人情報の提供

会員から情報の紹介依頼があった場合、折り返し対応させていただきます。また、第三者からの電話照会等での返答は致しかねますので、ご了承下さい。

3. 個人情報の管理

「会員名簿」は、施錠保管しており、「データベース」は、インターネットに接続していない専用PCで独立した作業を行っております。

《次号会報原稿募集》

★同期会報告

幹事の方は、氏名、卒業年、開催予定日を開催日前にご一報下さい。(出席者の会員確認を行います。)

- 条件
1. 正会員20名以上の参加
 2. 報告文、集合写真を提出(会報原稿)
 3. 会費未納者への納入勧誘
 4. 2年に1回
 5. 卒後20年まで(20年を含む)とする(削除)

上記、4条件が満たされれば、愛媛大学医学部同窓会は5万円の援助を行います。

★学生海外研修留学報告・医学祭報告(学生会員)

学年、氏名を事前にご一報下さい。

- 条件
1. 報告文、写真を提出(会報原稿)

《会費納入のお願い》

同窓会活動は、会員の皆様の会費で支えられております。会費納入をお忘れの方は、お早めに同封の用紙にてお振り込み下さい。

郵便振替NO. 01620-0-6644

ゆうちょ銀行169店 当座預金6644

加入者名 愛媛大学医学部同窓会

入会金を含む終身会費5万円

《会員名簿の不正使用禁止》

会員名簿は、会則により会費納入者のみ、一会員一冊の配布となります。

第三者に渡り不正に使用されますと、会員に多大な迷惑がかかります。他人に譲渡しないよう、また破棄する場合も特段のご配慮をお願い致します。事務局としても最大の注意を払っておりますが、皆様のご協力をあわせてお願い致します。なお、会員名簿の再送付は致しかねますのでご了承下さい。

注)卒業生と偽り、名簿の請求や他の会員の住所照会の問い合わせ電話があります。原則として電話での問い合わせには、即答致しかねますので何卒ご了承下さい。また、不審な業者から会員の方へ直接問い合わせがある場合も十分ご注意くださいようお願い致します。

《お願い》

会員の皆様のご寄稿、ご意見及びご感想などは是非お寄せ下さい。また、会報で取り上げてみたいテーマ、企画等アイデアがございましたらご一報下さい。お待ちしております。

お知らせ

第42回

愛媛大学医学部同窓会通常総会

次回通常総会の開催予定をお知らせします。日程が**9月第1土曜日に変更**となりました。特別講演会も予定しております。詳細につきましては、HPに掲載予定です。万障お繰り合わせの上、ふるってご出席下さいますようお願い申し上げます。

記

日時：2026年9月5日(土) 16時～

場所：松山市内を計画中(Web視聴可能)

議題：事業報告及び会計報告、予算の承認、その他

連絡先

〒791-0295 愛媛県東温市志津川

愛媛大学医学部同窓会事務局

★異動連絡届はこちらから★

TEL：089-960-5989

(受付 平日10時～15時)

FAX：089-960-5989

E-mail：eusmdoso@m.ehime-u.ac.jp

H P：http://www.m.ehime-u.ac.jp/dosokai/igaku/

